

「学校林における間伐の実践」

岩手県立久慈農林高等学校

おおさわ	りょうすけ	かぬか	こうき	こむかい	しょうた	さかがみ	けい	さわさと	こうし
○大沢	良輔	○鹿糠	香紀	小向	将太	坂上	佳	○澤里	晃志
しもだて	まさひこ	ほりはた	ゆうじ	やまざき	こうた	りんざき	ゆうじ		
下館	政彦	堀畑	裕二	山崎	幸太	林崎	雄二		

1 はじめに

本校が学校林で間伐実習を始めたのは、いくつかの理由がある。それは、学校林が久慈農林高校同窓会の所有地であり、校舎に隣接しており、いつでも、すぐに実習ができること、樹木の伐採についても、生徒が計画し実践できるようになっていること、森林組合や県の林務部の方の技術指導が得られること、丸太を集成材に加工してくれる工場が近くにあること、などである。しかし、なんとといってもこの「侍浜マツ」の産地であるということが、最も大きな理由だ。久慈地方の天然アカマツはその太さに圧倒されるが、通直な幹の形もまたすばらしいのだ。久慈地方の天然アカマツ林を観察すると若い頃からまっすぐに伸びていることがわかる。

このように森林資源に恵まれていることは地域の産業をみてもわかる。木炭の生産や木工品の製造、豊かな森が育てる豊かな海の生き物たちなど、久慈地方は森林資源をはじめとした自然の恵みをうまく活用した産業で成り立っている地区だ。

2 間伐の実践

ある日の授業の中でこんな話し合いがあった。「日本の人工林は間伐が遅れているというが久慈地方ではどうなのだろうか。」「間伐は本当に赤字になるのだろうか。」「自分たちで確かめてみよう。」こうして生徒の手による間伐の実践が始まった。

設定した課題は次の3つ。まず、間伐を実践する。つぎに、間伐材を集成材に加工してもらおう。さらに、その集成材で家具を作って販売する。である。

森林組合の先輩から指導を受けながら、作業スケジュールを立ててみた。アカマツは夏の間は伐採をしないことや、形状や太さによって用途が違ってくこともわかった。そして、意外にも「侍浜マツ」という名前は地元の人には知られていないこともわかってきた。



間伐の実習は次のような順序で行われた。まずはじめに対象林分内で選木をする。次に伐倒し、土場に集め、決められた長さに造材する。最後に種類ごとに巻き立てをして終了する。

実際に作業を進めていくと、とても難しい仕事だということがわかってきた。まず、伐倒はチェーンソーの使い方が複雑で、特に機械のメンテナンスの仕方は何度教わってもなかなかうまくできないし、玉切りでは木口が直角にならずに苦勞した。安全のためにも多くの注意が必要だった。

それでもなんとかトラック3台分の丸太を伐り出すことができた。丸太は1つ1つ材積を測って工場へ送り出した。

3 丸太のゆくえ

丸太の行方を追って、製材工場を見学した。僕らの生産した丸太のうち比較的太いものは製材され乾燥させた後、集成材に加工された。この工場ではフィンガージョイントというつなぎ方でラミナという縦長材をつくり、それを横方向につなぎ合わせて大きな板を生産していた。

小径木や曲がり材は砕かれてチップに加工されていた。チップは紙の原料のほか公園の歩道の材料にもなるということだった。

今回の実習で生産された丸太は用材向けが13.6%、チップ向けが3.4%であった。こうして実習に必要な集成材ができあがったのだが、予想されなかったこともあった。工場に出せない細かい残材が大量に発生したことだ。意外にも大量にでた細かい材は実習室の薪ストーブの燃料として使用したほか、大部分は製炭実習に利用された。

集成材加工に必要な費用は現金でなく、丸太で納めることにしてもらった。そのためにも多くの木を伐ることになったが、間伐が必要な林はまだまだあるので、山にとってはこの方がよいのだそうだ。

こうした取り組みは今年で5年目になる。時々、新聞やテレビでも紹介されているし、毎年秋に行われる本校の文化祭でも、学習の成果を展示、発表している。

4 家具の製作

平成13年度の岩手県植樹祭が久慈市の隣、野田村で行われた。僕らは野田村の植樹会場の山には1年も前から準備のために間伐や地拵えでボランティア参加していた。そうした中、植樹祭の記念に、自分たちの製作した木工品が役に立たないだろうかと考えていた。

家具の製作実習の課題は「子供用のテーブルセット」に決定した。そこで、植樹祭の記念に野田村にある5カ所の保育園にこのテーブルセットを1つずつ贈ることに決定した。植樹祭の実行委員の方と相談の結果、なんと、当日式典のプログラムの中で贈呈式をやろうということになった。話が急に大きくなってしまって、先生もかなりあせっていた。

あっという間に当日がきてしまった。会場には大きなテーブルセットを持ち込めないので4分の1のミニチュアをプレゼントすることにした。このミニチュアのテーブルセットを子供たちがとても喜んでくれたので本物の仕上げにも気合いが入った。

5 保育所にテーブルセットを寄贈

ようやくできあがったテーブルセットをバスに積み込み、保育園に向かう。何となく

不安が広がってきた。思ったより完成度は高いが、よく見ると細かい傷もあったり、ほんの少しだが寸法が違っているのを発見してしまった。

保育園に到着しテーブルを全員の前に置く。どの保育園でも歓迎のセレモニーが用意されていた。お礼のダンスや歌をプレゼントされ感激した。

伐採から、玉切り、製材工場の見学、木材加工までの実習の苦勞が次々と思い出された。けがをしたり、山に忘れ物をしたり、カモシカに遭遇したりと、ハプニングも多かったが、こうして自分たちの取り組んできたことが形になって、多くの人の記憶の中に残ることを思うと林業班を選択してよかったとしみじみ思った。

6 研究の成果

僕たちの取り組みは、毎年、文化祭で発表しているが、まとめると次のようになる。間伐実習に必要な知識や技術は林業のすべての教科書にまたがっているので、総合的な学習ができること。森林組合や製材所の方から指導を受けながら楽しく実習ができること。子供用のテーブルセットは大人にも好評で、文化祭では予想以上に販売ができたこと。半年間、地元のテレビ局の取材を受け番組が製作されたなど、関係者の反響が大きかったこと。などである。

人工林の間伐は全国的にも盛り上がってきているらしいので、地元の人たちと協力してPR活動には積極的に参加して、ますます、人工林の間伐が進むよう取り組んでいきたいと思う。

しかし、なんといっても今回の研究での成果は小さな子供たちに、林業のにおいというか、心というか、メッセージというかを届けられたことだ。

昭和の時代に久慈農林高校を卒業した先輩たちがお金を出し合って創設した学校林で今、僕たちが実習をしている。そのアカマツの間伐材を使った作品が平成生まれの、保育園児にプレゼントされる。こんなつながりが大切なんだよと、侍浜の大きなマツの木に教えられたような気がする。

